

古川今昔

～愛される古川～



戦時中まであった慶應橋
(当時の絵はがきより)

現在の養老橋

幕末期の古川(三之橋辺り:F・ベアト撮影)

白金公園親水テラスと白金公園橋

広重が描いた有馬家の火の見櫓と水天宮(部分)

有馬屋敷にあった火の見櫓を
形取った中之橋欄干

平成26年3月
編集：あざぶ達人倶楽部中級

古川は、JR渋谷駅近くで開渠になり、渋谷川、古川と名前を変えながら、麻布地区の南端を流れ東京湾に流入しています。古くから流れがあったために「古川」という名前がついたといわれています。

このガイドブック「古川今昔 愛される古川」は、港区の麻布地区総合支所が地域事業として実施している「あざぶ達人倶楽部」事業の中級受講者が協力しながら編集したものです。

「あざぶ達人倶楽部」事業は、麻布地区の歴史や文化・産業等地区的特色に関して精通し、主体的に実践活動に取り組んで、コミュニティの担い手となる人材を、発掘・育成し支援していくことを目的として運営されています。

古川今昔物語

古川は江戸時代から現代までの生活史・産業史に大きなかわりをもっています。

〈江戸時代〉

1653年(承応2)に玉川上水が完成し、その余水は現在の新宿御苑内で池を作り、さらに流下して古川の源流になっています。

明暦の大火(1657年)後の都市改造として拡幅工事が計画され、翌年に麻布十番にいたる船入り計画が立てられ、1675年(延宝3)に河口の芝・金杉より麻布十番にいたる拡幅工事が行われています。舟が行き来し、両岸には数多くの船着場がつけられ、水運が活発になりました。

古川は古川橋あたりまでは東へ流れ、急に北上し、一之橋あたりでまた急に東へ流れを変えています。これは、麻布十番に堀留ができたこと、元禄時代に麻布御殿造営に伴い古川が整備されたことが大きな理由です。

今は幻となっている入間(いりあい)川は、古川の三之橋あたりで分岐して東へ進み、芝で海に注いでいたといわれています。(諸説ありますが…)

〈明治時代・大正時代〉

古川には水車が作られ、精米などをつく臼が多く存在しました。慶應義塾の創立者・福沢諭吉も水車を保有していました。四之橋から新古川橋の古川沿いに、

1911年(明治44)の大水害(古川橋周辺)
(当時の絵はがきより)



狸橋付近で泳ぐ2羽の鴨



出典：東京都建設局ホームページ

馬を使う運送屋と馬小屋が軒を連ねていました。

明治時代の中期には、「富国強兵・殖産興業」のもと、国営工場や多くの民間工場がつけられました。

大正時代の後期には、治水のため河川改修工事が始まりました。

〈昭和時代〉

急速なインフラ整備が進む中、1962年(昭和37)に首都高速道路が、芝公園から古川の上を通過して六本木三丁目まで開通しました。古川を屋根のように覆い、太陽が十分あたらなくなりました。生活排水や工場排水で古川は汚れてしまいました。

〈現在〉

護岸工事や取水工事・排水工事などが進んでいます。2016年(平成28)には一時間50ミリの降雨に対処できる古川地下調節池が完成予定です。

清流復活事業により、鳥・魚・昆虫が戻ってきています。鯿、鮒、ボラ(下流)などが見かけられるようになりました。

〈これから〉

古川界隈には数多くの文化・歴史景観があります。説明掲示板が設置されていますが、昔の写真・浮世絵などを加えた掲示板が増えれば、人と古川の距離はもっと近くなります。

親水公園の整備、港区の木・ハナミズキ、港区の花・紫陽花・バラの植樹、ライト・アップなど、自然景観の回復をさらに進め、水の匂いや水面の輝きを楽しめる川になることを願っています。

参考文献：「古川物語」(森記念財団)、「渋谷川・古川 河川整備基本方針」(東京都) 協力：酒井好古堂・酒井雁高氏、DEEP AZABU・岩田隆之氏

古川と人

〈福沢諭吉(1835-1901)〉

「狸蕎麦」周辺を気に入っていた福沢諭吉は、1879年(明治12)、狸橋南岸の土地を購入して別荘を建築しました。その後、1884年(明治17)ころにはその東側の土地と水車も購入しました。当時、別荘の敷地内を三田用水白金分水が流れていたようで、現在も、狸橋からその排水口を見ることができます。

福澤は1888年(明治21)以降、水車のさらに東側の土地も次々と購入しましたが、これらの土地は北里柴三郎に貸与され、結核患者治療施設として利用されました。

福澤没後の1915年(大正4)、慶應義塾は狸橋から西側、天現寺橋周辺の土地を東京市から購入し、寄宿舎を建設しました。そして、古川には寄宿舎に通じる橋が架けられ、「慶應橋」と名付けられたそうです(現存はしていません)。その後、1936年(昭和11)に寄宿舎の敷地に三田から幼稚園が移転し、現在に至っています。

参考文献：「慶應義塾百年史」(慶應義塾)

〈寺坂吉右衛門(1665-1747)〉

1701年(元禄14)、赤穂藩主浅野内匠頭が、江戸城松之廊下で吉良上野介に対して刃傷に及び切腹となりました。その仇討として、翌1703年(元禄15)、赤穂浪士47名が吉良邸に討ち入りました。「忠臣蔵」として知られる事件です。

討ち入りに参加した大石内蔵助以下47名は浅野内匠頭の墓のある高輪の泉岳寺に向かいましたが、その道中、足軽寺坂吉右衛門のみが姿を消しました。寺坂の離脱については、逃亡説、密使説などがありますが、真相は明らかではありません。

大石ら46名はその後切腹となりましたが、寺坂は幕府の追手にかかることもなく生き延びました。討ち入りから約20年後には、現在の新古川橋の北側に所在する曹溪寺に寄寓し、その後、麻布古川町に上屋敷を構えていた土佐藩分家麻布山内家(土佐新田藩)に出仕し、83歳で死去しました。墓所は曹溪寺にあります。

〈青山二郎(1901-1979)〉

美術評論家で、小林秀雄・宇野千代ら多くの文化人と深い交流があったことでも知られる青山二郎が生まれたのは、当時の麻布区新広尾町1丁目、現在の一之橋周辺です。

青山の父である青山八郎右衛門は、古川兩岸の改修工事を機に沿岸の新田開拓を行った資産家であり、周辺の土地家屋を多く所有していました。青山は飯倉周

辺の土地家屋を多く所有していました。青山は飯倉小学校から麻布中学へ進学し、古川沿岸で生活する中で、美術への関心を強めていきました。

その後、青山は小山橋付近に転居した後、静岡県伊東市への疎開等で一旦は古川を離れますが、戦後しばらくして再び新広尾町に戻り、居を構えました。昭和30年代には二之橋のすぐ北東側に居住しており、現在この場所はカフェになっています。

古川と自然、治水

古川は、動植物が住みやすい場所とは考えられませんが、清流復活事業による環境整備が進められ、上流域には、セキレイや白鷺、野鴨等の鳥類が飛来し、又、10種類近くの魚類が生息し、生物と触れられる貴重な空間に導りつつあります。

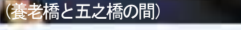
環境用水の導入、緑化、修景、諸施設の設置等様々な施策によって「新しいタイプの都市型河川環境を創造する」ことに取り組まれています。治水利水機能の向上とともに、望ましい河川環境創出のため、以下のキャッチフレーズによる環境整備が進められています。

1. 古川をコミュニケーションの場とする。
2. 古川をリフレッシュの場とする。
3. 古川を思い出の場とする。
4. 古川を地域づくりの場とする。

また、古川沿いは、台風や大雨によって幾度もの災害に見舞われてきました。この流域の下水、雨水は古川に集められ、大雨が降ると古川橋から一之橋あたりまでがたびたび溢水しています。その対策として、古川の護岸整備とあわせて古川の地下に雨水を貯める調節池の整備(恵比寿橋あたりから一之橋まで延長約3.3km)が進められています。

参考文献：「渋谷川・古川流域の総合的な治水対策暫定計画」平成4年4月 東京都部中小河川流域総合対策協議会、「古川環境整備計画基礎調査報告書」1986年3月 河川環境管理財団、「渋谷川・古川河川整備計画」平成20年10月 東京都

建設中の古川地下調節池取水施設
(養老橋と五之橋の間)



した。本図は現在ならば、渋谷区広尾と接する天現寺あたりから明治通り渋谷方面を見た構図で、160年ほど前の風景が描かれています。

②川瀬 巴水 東京十二ヶ月 麻布二の橋の午后

本図は望遠鏡で覗いたような面白い構図。午後の日溜り、光の明暗を捕えながら、連なる小さな家屋を描いています。この辺りは戦災で燃えていないので、現在でもほぼ同じような光景が見られます。



③歌川 広重 江戸名所 赤羽根水天宮

有名な水天宮の雨の景色。かなりの風雨で赤羽橋を渡る女性の裾が濡れています。傘も小さく、すぼめています。



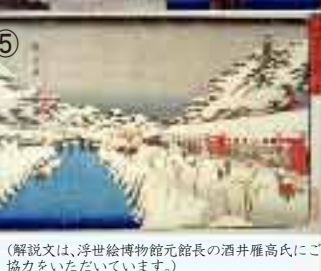
④歌川 広重 江戸名所之内 芝赤羽橋水天宮

女性が集い、青傘を差しながら赤羽橋を渡っています。服装をみると初夏から真夏にかけてと思われる。供を連れた侍は、笠をかぶっています。画面左に有馬屋敷が見えています。邸内の火の見櫓は高さ三丈(約9m)、方角火消(大名火消)の名残で、高く大きい櫓でした。



⑤歌川 広重 東都名所 芝赤羽橋の雪

赤羽橋の有馬屋敷は、当時(1800年前後)から名高い名所でした。赤羽橋の向こうの塔は、増上寺境内にある五重塔、右の有馬屋敷にある尼御前は、1808年(文化5)に祀られた水天宮で、1872年(明治5)まで江戸庶民に親しまれていました。火の見櫓は、有馬玄蕃頭の名前から、玄蕃の火の見と呼ばれていました。



(解説文は、浮世絵博物館館長の酒井雁高氏にご協力をお願いしています。)

描かれた古川

古川は、江戸時代から庶民に親しまれた川として浮世絵や名所図に数多く描かれています。

①歌川 広重 名所江戸百景 廣尾ふる川

四之橋を中央にしたのどかな風景、廣尾はかって水車などもあり、古川が流れる静かな田園風景でした。戦災以前(1945年ごろ)まで、そのまま自然が豊かな地域で

古川ガイドマップ(天現寺橋～赤羽橋)

●は橋を、●は建物を中心にしたガイドポイントを表します。白抜き番号は、その橋や建物が現存しないものを表します。

1 天現寺橋 (筈川合流口)
天現寺橋は、渋谷区と港区の区界、筈川との合流地点にかかる橋です。昭和初年までは筈川に架けられましたが、筈川が暗渠となり、昭和10年代に外苑西通りが南に延伸し、古川を渡る新たな橋が天現寺橋となりました。橋の下には、暗渠された筈川から古川への合流口を見ることができます。橋名となっている「天現寺」は、徳川家康の持仏といわれる毘沙門天像を本尊としています。付近は水量が豊かで、清流の回復事業が行われています。



天現寺橋の下に現れる筈川合流口

4 白金公園橋
白金3丁目の「白金公園」より南麻布3丁目にかかる人道橋で、1990年(平成2)に架設されました。橋の親柱には、「しろがねこうえんきょう」とありますが、設置されている案内地図には英字で、shirokane kouen hashi bridge(しろがねこうえんはしブリッジ)と表記されているのがおもしろい。白金公園は、2005年(平成17)に古川護岸の親水化工事にあわせ全面改修され、水辺に近づける親水テラスが整備されました。

5 四之橋
広重の「名所江戸百景」に描かれている麻布と高輪を結ぶ橋です。近くに土屋相模守の屋敷があったことから「相模橋」とも、また、麻布薬園があったので「薬園橋」とも呼ばれていました。浮世絵にある茶屋は、「狐鰻」という鰻屋で、頭のとがった鰻を出すことで評判の店でした。また、四之橋の近くで、尾張屋藤兵衛というものが汁粉屋を商っていました。時折、狐が化けて買いに来る「狐汁粉」として大いに繁盛したということです。

6 新古川橋(玉名川合流口)
白金1丁目から南麻布2丁目にかかる鋼橋。1935年(昭和10)に架設され、1989年(平成元)に架け替えられました。新古川橋の下で玉名川が古川に合流します。玉名川の流れる、山内遠江守下屋敷にあった「玉名の池」より流れ出し、樹木谷から松秀寺の西境を過ぎて、三田老増町を巡って白金志田町、白金三光町の境を北に向かい新古川橋で合流しています。

2 慶應橋(・養老橋)
福沢諭吉没後、慶應義塾は福沢諭吉の別邸西側の土地を購入し、寄宿舎を造っています。慶應橋はこの寄宿舎に通じる橋で、1915年(大正4)に完成し、戦時中まで現存していましたが、今はありません。また、福沢諭吉は土地を買い増して北里柴三郎に賃貸し、それが「養生園(現北里研究所)」になり、養老橋の由来になったといわれています。

3 狸橋
嘉永年間の江戸切絵図に「狸蕎麦」という地名がありますが、蕎麦にまつわる話が残っています。ある時、手拭いをかぶり、子供を背負ったおかみさんが蕎麦を買いに来たので売ったところ、翌朝そのお金は葉っぱになっていました。そこで、この辺りは「狸蕎麦」と言われるようになり、川に架かる橋を「狸橋」と呼ぶようになりました。また、江戸城中で討たれた狸の塚があったからとも言われています。福沢諭吉は、1879年(明治12)別邸を建てています。狸橋は別邸に通じる橋で、一時期は福沢家の所有でした。

11 ニューサンノーホテル
アメリカ軍関係者の宿泊施設で、民間人は原則として立ち入ることはできません。もともこの地にはわが国初のテレビジョン放送機を製作した安立電気(現・アンリツ)本社がありました。

7 二之橋 保科家屋敷
仙台坂と日向坂を結ぶ橋です。麻布側に飯野藩保科家の上屋敷がありました。そこに入りしていた信州保科村の反物屋清右衛門は、蕎麦を打つのが上手いことから、藩主の助言により蕎麦屋に転向しました。名前も木屋太兵衛と改め、藩邸に近い永坂で「永坂更科」を開店しました。「更科」とは、長野県千曲市にある地名「更級」の「更」と保科家の「科」を合わせたものと言われています。白い蕎麦粉を使用した高級な「御膳蕎麦」が評判となり、増上寺の僧もよく食されたということです。

8 一之橋(赤羽川合流口)
三田1丁目から麻布4丁目に至る鋼橋。現在の橋は1983年(昭和58)に改修されました。1699年(元禄12)の麻布御殿造営に伴う古川改修により、岡田将監屋敷の西側が召し上げられ、新堀堀割となり、そこに当時橋名「一ノ橋」「二ノ橋」が架け渡されました。水運の発達により、一之橋のたもとには享保(1716～1736年)の頃より荷揚場が出来、新河岸と呼ばれ、そこを經由して後背地の住宅に炭や薪が運ばれました。橋の袂には、六本木、元麻布、麻布十番方面からの水系を集めた赤羽川合流口が顔を出しています。

9 中之橋
1860年(万延元)アメリカ公使ハリスの片腕ともいわれた通訳、ヒュースケンが攘夷派の浪士に暗殺された場所がこの橋の付近です。彼は、赤羽接遇所から善福寺の公使館へ帰る途中に襲撃を受け命を落としました。光林寺にお墓があります。江戸時代、中之橋近くの有馬屋敷内にあった大きな火の見櫓は、浮世絵にも数多く登場しますが、橋の欄干にはこれを形どったものが配されています。

12 光林寺
臨済宗妙心寺派の寺院で、1678年(延宝6)ころに創建と伝えられています。墓域にはヒュースケンやイギリス公使館(東禅寺)で通訳をしていた伝吉の墓があります。境内の桜は港区の桜の名所の一つです。

10 赤羽橋
1675年(延宝3)の古川の拡幅工事にあわせて架けられ、現在の赤羽橋は、1974年(昭和49)に架橋されました。古川拡幅とともに水運が活発になり、薩摩、有馬、黒田屋敷等の物揚場、庶民の船着き場である赤羽河岸ができ、赤羽広小路には商家が集まり、縁日もたつなど賑わっていたようです。赤羽橋を中心とした風景が江戸時代の浮世絵や名所図に数多く描かれています。

13 麻布御殿
5代將軍徳川綱吉の時代、幕府の薬草園があったこの地に將軍の御殿が建設されました。竣工は1697年(元禄10)とされています。御殿建設工事の際に、古川の改修工事が行われました。一之橋付近で工事に従事した「十番組」の名前が、現在の麻布十番という地名の由来とされています。その後、御殿はわずか5年後に火事のため焼失してしまいました。

14 麻布大都館
明治になると、麻布にも芝居小屋が繁華街だった飯倉通りから少し中に入った芝森元町に出来ました。しかし、次第に寂れていったようで、三座あった小屋は明治25年頃にはすべてなくなりました。その後、寄席などもありましたが、昭和初期に河合キネマがここに映画館を開設

15 南座
四之橋と新古川橋の間の絶江坂下には大正時代の中頃に「弥生座」という芝居小屋が作られましたが、経営不振で1920年(大正9)松竹が買収し、「南座」と改称されました。翌1921年(大正10)に映画館となりましたが、関東大震災直後の1923年(大正12)には、被災した歌舞伎座などに代わっていち早く歌舞伎を上演し、市川中車一座が来演します。焼け残った麻布十番の末廣座には明治座が移転し、麻布はしばしの間、芝居上演を渴望する芝居ファンを癒しました。市内中心部が落ち着くとまた映画館に戻り、後に「麻布松竹館」と改称し、戦争末期まで存続しました。

16 山内家屋敷
このあたりにはかつて麻布古川町と呼ばれ、土佐藩の支藩である土佐新田藩の上屋敷がありました。参勤交代を行わずに江戸に定住する定府大名であったため、藩主の山内(やまうち)家は「麻布山内家」とも呼ばれていました。

17 赤羽接遇所
1859年(安政6)、講武所付属調練所の敷地に外国人のための宿舎兼接所を設けたものです。間口十間、奥行二十間のものと、2棟の木造平屋家屋から成っていたといわれています。アメリカ総領事館の通訳であったヒュースケンは1861年(万延元)、ここからアメリカ公使館の置かれていた善福寺への帰途、中之橋付近で襲われました。

し、その後麻布大都館となり、昭和17年の戦時統合で新興キネマなどと合併して大映になったために、麻布大映館は六本木の麻布新興館に置かれ、ここは「映音座」となりました。大都映画は低予算娯楽路線で、入場料も安く、庶民に人気が高かったのですが、麻布の賑わいは十番や四之橋、六本木に移り、戦争末期になくなったようです。

18 有馬屋敷と水天宮
筑後久留米藩二十一万石(外様)の上屋敷。現在の東京簡易保険事務センター、国際医療福祉大学三田病院、済生会中央病院、国際三田ビルなどを含む広大な敷地でした。邸内には久留米より分祀された水天宮(現在は日本橋蛸殻町)があり、御利益を願う江戸の庶民たちでにぎわったといわれています。なお三井倶楽部に抜ける神明坂には天祖神社(元神明宮)があります。創建は平安時代に遡る由緒ある古社です。



左が有馬屋敷、正面の森が元神明宮、右手の長屋塀は筑前秋月藩黒田家上屋敷 1863年頃 F・ペイト撮影



19 旧麻布日活館
一之橋公園の地は昔は河岸地でしたが、路面電車が古川沿いに開通した前後の1910年(明治43)、福宝堂がここに活動写真館の「第三福宝館」を建て、1912年(大正元)に他の3社と合併して日活となると、その直営館になりました。関東大震災後に「麻布日活館」と改称し、1929年(昭和4)に廃業した麻布十番の末廣座に移転しました。翌春までは「一之橋日活館」を名乗っていましたが、後の新東宝社長大蔵貢が買収し、「一之橋館」と改称し、戦時中に演芸館となって、1944年(昭和19)まで存続しました。全盛期は、一之橋の日活と四之橋の松竹が麻布での覇を競いました。